

和辻哲郎

「心」「道草」「その他

「心」「道草」その他

先生は眼の作家であるよりも心の作家であつた。画家であるよりも心理学者であつた。見る人であるよりも考える人であつた。私は先生が小説家というよりも寧ろ哲人に近いことを感じる。先生の作物に写実味の乏しいことは、そのために左程気にならない。(しかしドストイエフスキイが自分を写実主義者と呼んだ意義でならば、先生もまた写実主義者である。)

私は先生の芸術に著しいイデエを認める。一つの作物

の結構は凡てそのイデエから出ているように思う。この意味で先生の作物はかなり「作られた」という感じの強いものである。しかしその感じはイデエの力強さの下に直ぐに消えて行く。そうして我々は赤裸々な先生の心と向き合って立つことになるのである。

我々は先生の作物から単なる人生の報告を聞くのではない。一人の求道者の人間知と内的経路との告白を聞くのである。

利己主義と正義、及びこの両者の争は先生が最も力を

入れて取扱った問題であつた。

「猫」は先生の全創作中最も露骨に情熱を現わしたものである。それだけにまた濃厚な諧謔を以て全体を包まなければならなかつた。この作は恐らく先生の全生涯中最も道義的癩癩の猛烈であつた時代に書かれたものである。念入りに重ねられた諧謔の衣の下からは、世間の利己主義の不正に対する火のような憤怒と、徳義的背骨を持った人間に対する溢れるような同情とがのぞいてゐる。しかしこの時にはなお問題が先生自身の内生に喰ひ入ってはいなかつた。その後の諸作は漸次問題が内に深

まっで行く経路を示している。そうして最後の「明暗」に至って憤怒は殆んど憐愍に近づき、同情は殆んど全人間に平等に行き亘ろうとしている。顧みてこの十三年の開展を思うとき、先生も遙かな道を歩いて来たと感じざるを得ない。

その経路を概観して見ると、「猫」の次ぎに「野分」に於て正義の情熱の露骨な表現があった。「虞美人草」に至っては鮮やかな類型的描写によつて、卑屈な利己主義や、征服慾の盛んな我慾や、正義の情熱や、厭世的なあきらめなどの心理を剔抉した。その後の諸作に於ても

絶えずこの問題に触れてはいたが、それを著しく深めて描いたのは「心」である。その作に於ては利己主義は遂に純然たる内生の問題として取扱われている。私は利己主義の悪と醜さをかくまで力強く鮮明に描いた作を他に知らない。また執拗な利己主義を窒息させなければ止まない正義の重圧の気味悪い底力も、前者ほど突込んではないが、（殊に重大な所にギャップはあるが）力を入れて描いている。次ぎの「道草」に於ても利己主義は自己の問題として愛との対決を迫まられている。この作で特に目につくのは、主人公の我がいかに頑固に骨に喰い入

っているかをその生い立ちによって明らかにしたこと
と、夫や妻や其他の人々の利己主義を平等に憎んでいる
ことと、その利己主義を打ち砕くべき場合方法などを繰
り返し繰り返し暗示していることと、結局それがだんだ
ん実現されて行く光明ある結末が先生の作として極めて
珍らしいことなどである。この作は明らかに次で現われ
た「明暗」の前提をなしている。「明暗」に於ては利己
主義の描写が辛辣を極めているに關らず、作者は各人物
を平等に憐れみ、労わっている。そうして天真な心による
利己主義の征服を暗示するのみならず、一步一步その征

服の実現に近寄って行った。(先生はそれを解決しなかった。しかし或は——自らの全存在を以て解決したのではないか。)

私は極めて概括的な、そのくせバラバラになった観察を書いた。もともと誠意性の芸術に就いて適切な評論をなし得ようとは思っていなかったから、これ位で筆を擱きたい。

先生の芸術に就いてはなお論ずべき事が多い。私は先生が「何を描こうとしたか」に就いて粗雑な手を一寸触

れたのみで、「如何に描いたか」の問題には全然触れな
かった。そこへはいればとても容易に出られないと思っ
たからである。——下略（岩波書店発行「偶像再興」よ
り）

日本文学電子図書館

「心」「道草」その他

著 者：和辻哲郎

制作者：宮澤一郎

底 本：漱石全集(昭和49年版) 附録
岩波書店

昭和50年3月10日 発行

日本文学電子図書館